

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：37201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370350

研究課題名(和文) ポスト冷戦期アメリカ文学におけるディザスターとサバイバル

研究課題名(英文) Disaster and Survival in American Literature After the Cold War

研究代表者

渡邊 真理子 (Watanabe, Mariko)

西九州大学・健康福祉学部・准教授

研究者番号：70389394

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では「ディザスター」を人災および天災、戦争、テロリズム等の災厄と規定し、主にポスト冷戦期アメリカ文学におけるディザスター表象を中心に、現代人にとって普遍的な存在状況を表すサバイバルの形を考察した。その結果、以下のような研究成果が得られた。(1)アメリカ文化に持続する戦後の感覚、(2)Tim O'Brienのベトナム戦争小説に見られるパーソナルな物語性の前景化、(3)サバイバルを描くモードとしてのロード・ナラティブの歴史の変遷、(4)冷戦期末期におけるラテンアメリカの視点によるアメリカ的サバイバルの脱構築、(5)アメリカ南部と日本との戦後表象の共振。

研究成果の概要(英文)：This research project has examined various modes of contemporary human survival in literary works published mainly in the post-Cold War America, by focusing on the "disaster" broadly defined to include wars and acts of terrorism. The results of the research are roughly as follows:(1)Continued post-war mindsets in American culture after the 9.11 terrorist attacks (2)The foregrounding of personal narratives instead of national history in the series of Vietnam War novels by Tim O'Brien (3)The historical transformation of the American road narrative as a mode of writing survival (4)Deconstructed American survival by the literary and cultural representations of Latin America during the last phase of the Cold War (5)The perpetual sense of defeat in the American South in resonance with post-war Japanese mindsets.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ディザスター 戦争小説 現代アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 災害に関する海外の研究には、災害便乗型資本主義を論じた Naomi Klein の *The Shock Doctrine* (2008)、災害時に発生する楽園的コミュニティを解説した Rebecca Solnit の *A Paradise Built in Hell* (2009) 等があるが、アメリカ文学に関しては国内外で体系的な研究の到来が待たれている状況であった。かつて災害ナラティブの考察は主にジャーナリズムの仕事であったが、今世紀に入ってトランス・ナショナルな傾向を強めたアメリカ研究の動向として、Gayatri Spivak が比較文学の領域において提唱した惑星思考に対する応答として、Wai Chee Dimock は *Through Other Continents* (2006) において世界文学としてのアメリカ文学の再考を主張し、また、Lawrence Buell らは「グローバル」から「プラネタリイ」へのパラダイム転換によって環境文学批評を更新した。

(2) 国内では東日本大震災を受けて「災害と文学」を考える研究の必要性が唱えられ、それがアメリカ文学の領域にも及んでいた。このような動向の一例として、私が文学分野の発表者として登壇したアメリカ学会第 46 回年次大会 (2012 年) における部会「災害と表象」が挙げられるだろう。この時の発表により、グローバル化の加速により一国中心のアプローチによる文学研究が有効性を失いつつある段階において、異なる国家間の問題を連動させ、原爆 (戦争) と原発 (災害) を共にアトミック・ディザスターと捉え、冷戦期とポスト冷戦期を二分化することなくループ状に眺める視点をもった文学研究の形が求められていることを確信するに至った。つまり、戦争・災害・テロリズムの文学を人類のサバイバルとの関係において包括的に考察する視座こそが必要であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、ディザスター (disaster) を「人類のサバイバルに関わる災害 (人災及び天災)・戦争・テロリズム」と規定し、ポスト冷戦期アメリカにおけるディザスター文学を「サバイバル」という視点から比較考察することを目的とする。具体的には、冷戦期からポスト冷戦期へと移行してきたサバイバルの形を、「歴史と記憶」「国家と個人」の二点を焦点に分析することであった。

(2) これまでアメリカ文学におけるサバイバル研究はマイノリティ文学におけるアイデンティティ・ポリティクスに限定されることが多かった。しかし、核をめぐる不安から世界の終末を想像する感覚が浸透した冷戦期が終わって久しい現代、グローバル化の渦中で 9.11 そして 3.11 という災厄を経由した私たちにとって今やサバイバルはより普遍的な人間の存在状況を示す。言語に絶する災厄を表象した文学作品を考察するこの課題が、

ポスト 3.11 の日本から発信される日米を比較する視点をもった今日的で革新的なものとなることを目標とした。

3. 研究の方法

(1) 戦争とテロリズムについては、ポスト 9.11 小説群、Tim O'Brien のヴェトナム戦争小説群、そしてこれらの特徴をより明確にするために第一次世界大戦・第二次世界大戦を扱った William Faulkner の小説群を分析し、その結果をアメリカ文学サイババル研究会において随時報告した。冷戦の歴史的文脈と南北戦争および南部文学については、「冷戦読書会」での討論において理解を深めた。災害を扱ったポスト冷戦期小説に関しては、アメリカ南部の原発の町を舞台とした Bobbie Ann Mason による小説 *An Atomic Romance* (2005)、Cormac McCarthy の *The Road* (2006) 等を精読するとともに、最新の研究動向を把握すべくアメリカ学会や日本アメリカ文学会の年次大会に参加して情報収集を行った。

(2) アトミック・ディザスターおよび「戦後」表象を歴史化するために、奈良美智や村上隆など核を意識した表現活動を行う現代アーティストによる展覧会、2014 年夏にニューヨークのエイコンシアターで上演されたマンハッタン計画を題材とした演劇 *Atomic* の鑑賞、日米比較の角度から戦後表象を捉えるために 2017 年冬にサンフランシスコ近代美術館で開催された企画展 “Japanese Photography from Postwar to Now” など、国内外で資料収集および実地調査を行った。

これに関連して純文学よりもかなり早くに核の問題を取り上げてきた SF 文学にも注目し、特に冷戦期からポスト冷戦期に発表された Kurt Vonnegut や Phillip K. Dick や Kim Stanley Robinson らの作品の読解にあたった。

(3) 東西分割という冷戦体制が終焉したポスト冷戦期文化の地政学を広く理解するために、「移動」が主題となる Steve Erickson の *Rubicon Beach* (1986) や Russell Banks の *Continental Drift* (1985) 等の小説を考察の対象に含め、アメリカの視点から眺めた他者としてのラテンアメリカ表象と、ロード・ナラティブにおけるサバイバルの諸層に焦点を合わせた読解を行った。また、早くから核の問題を取り上げてきた SF 文学にも注目し、特に冷戦期/ポスト冷戦期に発表された Phillip K. Dick や Kim Stanley Robinson らの作品の読解にあたった。

4. 研究成果

(1) ポスト 9.11 の文学思潮を踏まえた上で 20 世紀初頭へと時代を遡ることで、戦争やテロを生き延びた者がホームへと持ち帰る “post-disaster” としての「持続する戦後」という感覚が特に南部小説において顕著に

認められることが分かった。このことは、戦場が多くの場合国外に存在するアメリカの戦争文学について考える際に、前線における戦闘行為や戦時下の社会的・文化的状況だけではなく「戦後」に注目することが重要であるという発見につながった。この研究成果として、第一次世界大戦を背景とした William Faulkner の *Soldier's Pay* (1926) や *Flags in the Dust* (1927) における帰還兵の表象と Jay McInerney の *The Good Life* (2006) に呈示された 9.11 米国同時多発テロ直後のアメリカと共振する「戦後」感覚の持続性について、2014 年 10 月に日本ウィリアム・フォークナー協会第 17 回全国大会シンポジウム「フォークナーと戦争」で口頭発表を行った。

さらに、上記の発表をもとに同学会機関誌『フォークナー』第 17 号に論文「サバイバルと「戦後」」を発表した。時代も出身地も作品の舞台もまったく異なる二人の作家を比較考察するこの論文は、冷戦末期の 80 年代に「新たな失われた世代」として登場した北部作家 McInerney が、ポスト 9.11 のニューヨークを敗北した南部に擬えた点に着目する。同時多発テロの傷跡を表現する際に、アメリカ国内が戦場となった 100 年以上前の南北戦争の記憶が呼び起こされるという時間的隔たりに、テロ文学と戦争文学の描き方に共通するモードと、アメリカ文化の中に絶えず持続している「戦後」の感覚を定位した。

(2) Tim O'Brien のヴェトナム戦争小説群が政治的イデオロギーや歴史ではなく個人のサバイバルと記憶を主題としていることが導き出され、この意味において特に *The Things They Carried* (1990) がポスト冷戦期アメリカ戦争小説の典型である可能性が認められた。この成果として、連携研究者の下條恵子氏（九州大学）とともに関東と関西から専門家二名を招聘し 2016 年 12 月に福岡市に公開ワークショップ「ポスト冷戦期文学における戦争とサバイバル」を開催した。この企画は研究者のみならず現代アメリカ文学に関心をもつ一般の方々の参加にも恵まれる有意義なものとなった。

また、2017 年 10 月には日本英文学会第 70 回九州支部における招待発表「ホームへの帰還 Tim O'Brien のヴェトナム」で、O'Brien のヴェトナム戦争表象の特徴であるパーソナルな物語性の前景化について論じた。この口頭発表では、デビュー作 *If I Die in a Combat Zone, Box Me Up and Ship Me Home* (1973) からもっとも新しい小説 *July July* (2002) まで O'Brien がこれまでに発表した 9 冊の作品すべてを「ホーム」という観点から考察した。先行研究ではそれほど注目されていないミネソタ表象を分析した上で、アメリカ文学において北部、南部、西部と比較すると際立った特徴に乏しいとされてきた中西部のそれを、この作家が「すべてを同質化する力」として呈示していることを明ら

かにした。

広くアメリカ戦争小説について再考するために行った資料読解の成果として、『アメリカ文学研究』第 53 号に掲載した短評（久我俊二著『スティーヴン・クレインの「全」作品解説』）と、同誌第 54 号の書評（上岡伸雄著『テロと文学 9.11 後のアメリカと世界』）が挙げられる。クレインの作品については、上述の公開ワークショップ「ポスト冷戦期文学における戦争とサバイバル」での口頭発表「ティム・オブライエンのヴェトナム」の序盤で整理したアメリカ戦争文学の系譜が、この短評を執筆するにあたっても有益なものとなった。

さらに、アメリカ学会第 56 回年次大会自由論題 B「文学と映画における帝国主義・新自由主義・民主主義」の討論者として行ったコメントでは、上記の知見を反映しつつ、Ernest Hemingway の第二次世界大戦に対する態度と、Cormac McCarthy のポスト冷戦期サバイバルとメキシコ表象についても述べた。

(3) アメリカ文学史に頻出する「路上」のモチーフから辿るサバイバルの諸層を『アメリカ文化事典』（丸善出版）で担当した項目「ロード・ナラティブ」の中で整理するとともに、このジャンルの金字塔とされる Jack Kerouac 作 *On the Road* (1957) における冷戦リベラリズムや、Cormac McCarthy が *The Road* (2006) で描いた人類のサバイバルがポスト冷戦期の特徴をなす脱アメリカ化されたロードの物語である可能性についても論じた。

伝統的には白人男性主体が中心であったロード・ジャンルが特に冷戦期末期に女性やマイノリティ主体のサバイバルを扱うようになったことを、共著『アメリカン・ロードの物語学』（金星堂）に収めた論文「クロスロード・トラフィック 一九八〇年代アメリカ小説から読むロードの物語学」において明らかにした。

(4) アメリカ中心のサバイバルの形を相対化して脱構築する視点の表出として、Steve Erickson、Jay McInerney、Russell Banks らの 80 年代小説にラテンアメリカの人々が描かれることを明らかにし、レーガノミクスと移民規制の強化という時代的背景において、ラテンアメリカが「強いアメリカ」という光に対する影として存在していることを理解できた。このことを『アメリカ研究』49 号の特集モンロー・ドクトリン再考に論文「ラテンアメリカの影 1980 年代小説と半球思考」として発表し、19 世紀のモンロー・ドクトリンによって生まれた半球分割の思考が、アメリカの物語史において 20 世紀後期においても変奏を繰り返しながら継承されていることを明らかにした。

(5) 核とサバイバルについては、架空の原爆詩人アラキ・ヤサダ事件を中心とするフェ

イクの物語の出現や、村上隆など日本の現代アーティストの視覚表現に認められる敗戦の影響と「戦後」の表象、アメリカ文化における男性的眼差しに貫かれた女性ジェンダー化されたキノコ雲のイメージ等について、2014年11月に西九州大学健康福祉・生涯学習センター公開講座「日米文化における核の表象について」を開催し、研究成果を一般市民に向けて発信した。

(6)SF文学に関しては共著『21世紀から見るアメリカ文学史 アメリカニズムの変容』（英宝社）のなかで、冷戦期SFとしてKurt VonnegutやPhillip K. Dickを取り上げ、それらの作家が核の脅威と冷戦のサバイバルをポストモダン思想と連動したリアリティを流動化させる形で表現したことを指摘した。また同書では、ポスト冷戦期の到来を予期させるKim Stanley Robinsonの火星三部作が想起させるアメリカの開拓の歴史、William Gibsonのポスト9.11小説*Pattern Recognition*(2003)における冷戦期再考についても論じた。

その他、このジャンルに関する研究成果として、『スクリプナー思想史大辞典』における翻訳 特に「ディストピア」「サイエンス・フィクション」の項 も付け加えておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

渡邊 真理子、「短評 上岡伸雄著『テロと文学 9.11後のアメリカと世界』」、『アメリカ文学研究』、査読有、第54号、2018、90

渡邊 真理子、「短評 久我俊二著『スティーヴン・クレインの「全」作品解説』」、『アメリカ文学研究』、査読有、第53号、2017、122

渡邊 真理子、「サバイバルと「戦後」」、『フオークナー』、査読有、第17号、2015、56-72

渡邊 真理子、「ラテンアメリカの影 1980年代小説と半球思考』、『アメリカ研究』、査読有、第49号、2015、81-98

〔学会発表〕(計5件)

渡邊 真理子、「ホームへの帰還 Tim O'Brienのヴェトナム』、日本英文学会第70回九州支部大会招待発表、2017

渡邊 真理子、「ティム・オブライエンのヴェトナム』、公開ワークショップ「ポスト冷戦期文学における戦争とサバイバル」、2016

渡邊 真理子、「Tim O'Brienの修作時代

The Northern Lights におけるモダニズム文学の影響』、アメリカ文学サバイバル研究会第15回例会、2015

渡邊 真理子、「ヴェトナム戦争とサバイバル(1) *If I Die in a Combat Zone*を読む』、アメリカ文学サバイバル研究会第12回例会、2015

渡邊 真理子、「サバイバルと「戦後」小説』、日本ウィリアム・フォークナー協会第17回全国大会、2014

〔図書〕(計4件)

早瀬博範編、渡邊 真理子(項目執筆) 英宝社、『21世紀から見るアメリカ文学史 アメリカニズムの変容』(担当項目「サイエンス・フィクション」)、2018、152 - 156

アメリカ学会編、渡邊 真理子(項目執筆) 丸善出版、『アメリカ文化事典』(担当項目「ロード・ナラティブ」)、2018、570 - 571

スクリプナー思想史大辞典翻訳編集委員会、編集委員長野家啓一、渡邊 真理子(項目翻訳) 丸善出版、『スクリプナー思想史大事典』(担当項目「フォルマリズム」「モダニズム」「新批評」「ディストピア」「サイエンス・フィクション」)、2016、4000

松本昇、中垣恒太郎、馬場聡、渡邊 真理子(分担執筆)、金星堂、『アメリカン・ロードの物語学』(担当「クロスロード・トラフィック 一九八〇年代小説から読むロードの物語学」)、2015、361-379

〔その他〕

渡邊 真理子、「日米文化における核の表象について』、西九州大学健康福祉・生涯学習センター公開講座、2014年

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 真理子(WATANABE, Mariko)
西九州大学・健康福祉学部・准教授
研究者番号：70389394

(2)連携研究者

越智 博美(OCHI, Hiromi)
一橋大学・経営管理研究科・教授
研究者番号：90251727

下條 恵子(SHIMOJO, Keiko)
九州大学・言語文化研究院・准教授
研究者番号：30510713